

福岡県の風水害

－ 次の世代に語り継ぐ、忘れてはならない歴史2 －

研究発表

◆「遠賀川の被害と治水の歴史」 千々和 昭男 氏 (八幡郷土史会)

嘉穂郡の馬見山に流れを發して響灘に注ぐ大河、遠賀川。流域には低地が多く、大雨がふり洪水となり大きな被害をもたらしてきました。古文書には、江戸時代の住民が直面した困難が生々しく記録されています。慶長5(1600)年に筑前国領主となった黒田長政の遠賀川治水大計画にはじまる、大正時代まで続く遠賀川治水の歴史をひもときます。

◆「平成2年7月と平成24年7月に八女地域を襲った水害」

山口 祐士郎 氏 (懐良親王顕彰会)

平成2(1990)年7月の豪雨では立花町に多大な被害が出ました。また、平成24(2012)年7月の九州北部豪雨では、道路決壊や崖崩れで八女地域に孤立集落が発生しました。当時を振り返り、地域コミュニティの大切さや共同体意識、絆の強さ等を報告します。

◆「遠賀郡の二つの年代記に見る江戸時代の風水害」

有馬 守 氏 (八幡郷土史会)

江戸時代の遠賀郡に存在する二つの年代記『年歴算』と『筑州鎮守岡郡宗社志』。それぞれに記載された風水害に関する記述を検証します。また、『福岡県地理全誌』(明治13(1880)年)に記された当時の村々の人口と、現在の旧遠賀郡に当たる市町村の人口とを比較する中で、江戸時代の遠賀郡の様子を推測します。

◆「筑後地域及びその周辺地域における気象災害～森林管理の立場から～」

福島 敏彦 氏 (久留米郷土研究会)

災害は繰り返し発生し、その度に「未曾有の災害」という表現をよく耳にします。福岡県内で知名度の高い災害は約10年ごとに発生して、最近では地下浸水などが頻繁に発生しています。これらの災害を江戸時代から今日までの九州全域と筑後地域の歴史的な視点から比較して、災害対策を考えます。

期 日 令和5年 6月24日(土) 13:00~15:50 ※受付開始 12:30

会 場 福岡県立図書館 地下1階レクチャールーム (福岡市東区箱崎 1-41-12)

定 員 100名 (事前の申込が必要です。) ※申込用紙は裏面

参加費 無料

主催 福岡県教育委員会
福岡県地方史研究連絡協議会 (福史連)

